望月　海慧　博士（文学）学位請求論文審査報告書
論文題目：ディーパンカラシュリージュニャーナ研究

本論文は、11 世紀にインドのビハール州東部にあったヴィクラマシーラ Vikramaśīla 大僧院からチベットに仏教を伝えたディーパンカラシュリージュニャーナ Dīpaṃkaraśrījñāna が著した密教と顕教の全著作中、とくに顕教すべてに目を通して、チベット仏教に多大な影響を与えたかれの思想を考究しようとするものである。

ヴィクラマシーラ大僧院はパーラ朝のダルマパーラ王によって 8 世紀末から 9 世紀初頭ごろに創建され、教師 100 人、学生 1000 人を越える規模を誇り、多くの優秀な人材を輩出し、しばしば諸外国から招聘されて仏教を弘めたといわれる。その中でも最も高名な僧が Atiśa ともいわれる Dīpaṃkaraśrījñāna である。

序論第１編生涯と著作、第１章はじめに、第１節「アティシャ」の名称について、これまで日本の学者は Dīpaṃkaraśrījñāna を「アティーシャ」「アティシャ」と呼んできたが、海外の学者の見解を紹介しながら、その結論を保留し、Dīpaṃkaraśrījñāna としている。

第２節では Dīpaṃkaraśrījñāna の生涯を、入蔵前、チベット招請、ガリ滞在、ウ・ツアン（中央チベット）への招聘を概説。第３節ヴィクラマシーラ僧院における Dīpaṃkaraśrījñāna の伝記資料をヘルムート・アイマーの研究によって概説し検証している。その結果、Mahāpāla の時代にヴィクラマシーラに招かれ、Bheyapāla の時代に座主となり、Neyapāla の時代にチベットへと旅発ったが、資料間に相違があり、さらなる考究が必要であるとする。

第２章　Dīpaṃkaraśrījñāna の著作では、チベット大蔵経テンギュルの分類に基づき般若部２点、中観部３０点、経疏部１点、書簡部１点、雑部３点、密教部７０点を明らかにしているが、近年中国の蔵学出版社が刊行した『阿底峡全集』にはこれら以外の著書も含まれているという指摘のみで、なぜそのようになっているかについての論者の言及はない。

第３章従来の研究では、１８世紀の A.A.Georgius *Alphabetum Tibetanum* におけるアティシア（Atiscia）に関する記述以降、現代に至るまでの研究成果を概観している。

第２編 Dīpaṃkaraśrījñāna の思想背景

第１章 Dīpaṃkaraśrījñāna の Nāgārjuna 観では、中観派の祖といわれる龍樹 Nāgārjuna が Dīpaṃkaraśrījñāna の著作のなかでどのように言及されているかについて Nāgārjuna 観を再確認した結果、Nāgārjuna の著作に関して６

５回の言及があり、そのなかでも『菩提道灯論細疏（*Bodhimārgadīpapañjikā*）』に３５回、『中観説示開宝筐』に２３回であること、Nāgārjuna の著作のうち５１作品が数えられること、特に *Bodhicittavivaraṇa* には１５回、引用される偈は１１２偈全体の１１偈もあり、Dīpaṃkaraśrījñāna の *Bodhimārgadīpapañjikā* と *Ratnakaraṇḍodghāṭa* での菩提心が Dīpaṃkaraśrījñāna 思想の主要テーマであったからであるとして、Dīpaṃkaraśrījñāna が最も多く引用する Nāgārjuna のテキストは *Bodhicittavivaraṇa* であり、『中論頌(*Mūlamadhyamakārikā*)』の引用も次に多いが、その他の中観論書はそれほど言及されておらず、Nāgārjuna については、中観派の開祖であるということを含めて大乗仏教の祖とするものであり、金剛乗の著者にも及ぶとする。

第２章 Śāntideva への依拠では、仏教学者によく知られている Śāntideva の『入菩薩行論（*Bodhicaryāvatāra*）』に対する Dīpaṃkaraśrījñāna の注釈書『入菩薩行論釈（*Bodhisattvacaryāvatārabhāṣya*）』取り上げ、Śāntideva の『入菩薩行論（*Bodhicaryāvatāra*）』から引用された偈頌の数からも Dīpaṃkaraśrījñāna にとって重要な論書であったこと、後のチベット仏教でしばしば言及される二種の菩提心はこの書に依ることを究明している。また『菩提道灯論細疏（*Bodhimārgadīpapañjikā*）』、『中観説示開宝筐（*Madhyamakopadeśaratnakaraṇḍodghāṭa*）』、小部集、『大経集』に属するテキストを取り上げ、Dīpaṃkaraśrījñāna はラムリン思想の基盤を形成する重要な論拠として Śāntideva の著書に依拠していたとする。

第３章中観の師 Bodhibhadra では、Dīpaṃkaraśrījñāna が学んだ師のうち Bodhibhadra を取り上げ、Dīpaṃkaraśrījñāna の『菩提道灯論細疏（*Bodhimārgadīpapañjikā*）』は Bodhibhadra のテキストに依拠して著されたこと、Bodhibhadra に対する呼称から同時代の中観思想の師であることを究明している。

第４章中観と唯識を融合する「大中観」とは何かでは、Nāgārjuna の中観と Asaṅgha の唯識とを「ふたつの偉大な乗り物」の開祖をして位置づけ、対立する両思想を融合しようとして「大中観」という立場を説いた Dīpaṃkaraśrījñāna の思想背景とチベット仏教に与えた影響について論述している。

第２部　第１編小部文献　第１章『菩提道灯論』『菩提道灯論細疏』では、『菩提道灯論』に対する自注として『菩提道灯論細疏』が、アティーシャすなわち Dīpaṃkaraśrījñāna によって著されたといわれているが問題があるという最近の学説に対して検討を加え、根本偈とは異なる補足偈が『菩提道灯論細疏』が多く述べられているから、しばらく時をおいて

Dīpaṃkaraśrījñāna 自身によって書かれたと思えるとし、『菩提道灯論』を和訳している。

第２章『入二諦論』では、先行研究を踏まえて検討し、中観論師を自立論証派と帰謬派と分ける現代の学問の傾向の間違いを指摘し、『入二諦論』の和訳を付す。

第３章『中観説示』では、Dīpaṃkaraśrījñāna の作とされる『中観説示』の二種のうち、短編を取り上げ、『中観説示』と『開宝筐』との関係を論じ、二諦説について考察し、和訳を付している。その他の取り扱っている文献は、 第４章『心髄集』と『心髄摂集』、第５章『無垢宝書翰』『菩薩摩尼鬘論』『菩薩行略教訓』、第６章『輪廻出離意歌』『行歌』『法界見歌』、第７章『一念説示』、第８章『入菩薩初学道説示』『行集灯論』、第９章『帰依説示』 第 10 章『大乗道成就法語集』『大乗道成就法集』、第 11 章『自作次第勧誡語句摂集』 『上師所作次第』、第 12 章『経義集説示』第 13 章『十不善叢道説示』、第 14 章『業分別論』第 15 章『三昧資糧論』、第 16 章『罪過懺悔儀軌』『超世間七支儀軌』『読誦読経前行儀軌』『波羅蜜乗甎仏造作儀軌』『一切業障摧破儀軌』、 第 17 章『発心律儀儀軌次第』、第 18 章『種姓誓願』である。

第２部　　注釈文献では、第１章『般若波羅蜜多摂義灯論』、第２章『般若心解説』、第３章『経集摂義』、 第４章『業障清浄儀軌解説』、第５章『入菩薩行論釈』、 第６章『十万頌般若摂義』を取り上げている。

第３部 アンソロジー文献 では、第１章『大経集』、第２章執事を説く経典 、 第３章非行境を説く経典 、第４章星宿を排除する経典、第５章 『大経集』における『般若経』の引用 、 第６章『大経集』における『正法念処経』の引用 を扱っている。さらに密教文献にも触れ、

第４部　　真言乗文献第１章秘密集会文献、第２章ターラー成就法文献、 第３章 『金剛座金剛歌』、第４章 『根本過犯注』、第 5 章 Dīpaṃkaraśrījñāna の顕教文献における密教文献へ言及している。

第５部チベット仏教に与えた影響第１章 『ラムリム・タルゲン』に引用される『菩提道灯論』、 第２章 『ラムリム・チェンモ』に言及される Dīpaṃkaraśrījñāna、 第３章 Bu ston rin chen grub の『法行楽道』について 、第４章 Co ne Grags pa bshad sgrub による『菩提道灯論釈』を扱い、結論、参考文献 としている。

ところで、望月氏が全体としてどのようなディーパンカラシュリージュニャーナ像を描いているのかはっきりしないことがある。特に、ディーパンカラシュリージュニャーナの「大中観」（dbu ma chen po）に対する検

討の結果が、そのディーパンカラシュリージュニャーナ像を曖昧にしているように思われる。というのは、アサンガの智慧波羅蜜理解が唯識であり、ラトナーカラシャーンティもそれに従うこと、他方、ナーガールジュナの智慧波羅蜜理解は「大中観」であると説く『菩提道灯論細疏』を引用するにもかかわらず（p. 103）、望月氏は、ラトナーカラシャーンティとディーパンカラシュリージュニャーナを結びつけ、それを「大中観」という語の内容と考えようとしているからである。ディーパンカラシュリージュニャーナ自身に中観派であるという意識があるとすれば、その『菩提道灯論細疏』の言葉はむしろ、唯識派のラトナーカラシャーンティを遠ざけようとするものではなかろうか。事実、『菩提道灯論細疏』の別の箇所でディーパンカラシュリージュニャーナが自身の法統を述べる時に、ラトナーカラシャーンティを述べることはない（p. 121）。中観派が瑜伽行派の実践を取り込むことも後期中観派にとっては一般的なことであり、そこに特殊な「大中観」理解を持ち込む必要があるかどうかなお検討が必要であろう。

しかしながら、従来の研究は、特定の著作だけを取り上げ、彼の中観思想理解を論じているものであったが、本研究は、すべての著作を取り上げることで、その思想が形成される背景からその思想的特徴までを解明しようとするものである。また、それは後期インド仏教の論師に対する最初の本格的研究であり、その成果は後期インド仏教・チベット仏教の思想史研究・文献学的研究に大きな貢献をもたらすものでもある。よって博士論文として優れたものと評価する。

なお、本論文の審査に際しては、文学研究科の内規により、平成２８年１月２８日に公聴口頭試問をおこない、論者の研究の向学とその力量の確実なることを確認した。

よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断し認定する。

平成２８年１月２８日

主査　立正大学大学院文学研究科仏教学専攻
教授　三友　健容

副査　立正大学大学院文学研究科仏教学専攻
教授　高橋　堯英

副査　京都大学大学院文学研究科文献文化学専攻
准教授　宮崎　泉